



文 ジュディス・ベナム・ユエ
写真 シルビア・ドラス

伝統の未来形

アーティストでもあるカメルーン人デザイナーが、日本の文化に魅せられた時、遠く離れた二国の伝統と文化遺産に共通点を見出した。そして生まれたのが「アフリカン・キモノ」だ。ふたつのアイデンティティと伝統を称え、双方に共通する帰属意識に根ざした独創性を見つめることで、新しい美意識の扉が開かれる。

「ゆっくり急げ。くじけず、何度でも立ち戻って、自己の芸術を完成させよ」。17世紀フランスの詩人ニコラ・ボアロー・デプレオーの言葉が、アーティストでデザイナーのセルジュ・ムアングの心に刺さった。彼は、地球上の異なる地域に伝わる文化的伝統を融合させて、ハイブリッドな着物を創作している。「この仕事をしていると、いつも完璧を求めて夢中になってしまう。構成し、試し、再び試し、改良する——その繰り返しに時間を費やしています」。

1973年に西アフリカ・カメルーンの首都ヤウンデに生まれたセルジュ・ムアングは、6歳の時に両親とフランスに渡り、パリの貧しい公営住宅地で育った。父親は彼が弁護士かエンジニアになることを望んでいたが、幼くして絵の才能に恵まれたムアングは美術学校に進み、ENSCI（国立産業創造学校）で工業デザインを学んで、1999年に卒業した。旅行好きで彼は、学生時代にフランス国内やヨーロッパ各地を訪ね、トルコや中国、メキシコ、アメリ

カにも足を伸ばした。実習先のオーストラリアでは、2002年にブリツカー賞を受賞した建築家グレン・マーカットのもとで1年間インターンとして働いた。そこで妻となる女性と出会い、結婚し、第一子に恵まれた。

2000年にパリに戻ったムアングは、ルノーのテクノセンターに入社。コンセプトカーのデザインチームに加わったが、2006年、同社のパートナーである日産自動車から東京に置く関連会社、クリエイティブボックス

に勤務するため日本に渡った。その後の5年間を日本で過ごした彼は、この国とその文化に驚かされることになる。日本に住むカメルーン人として、ムアングは母国と日出ずる国の類似点に感銘を受けた。「日本の社会が本質的に規律正しいのに対し、西アフリカでは即興が生き延びるためのひとつの手段。もちろん、そういう違いはありますが、このふたつのアイデンティティには多くの共通点があるのです」と、ムアングは言う。「例えば、どちらの文化も若者と年配者の関係を重視します。日本ではその階層性が伝統的に高度に体系化されていて、相手が男性か女性か、専門家かどうか、年配者かもっとずっと高齢者か、若者かによって話しかけ方が違います。これは西アフリカでも同じです。ブドゥー教に見られる死者との結びつきと、神道文化に遍在する死者の霊との関係にも通じるものがあります。美的な面では、ブヌ族の仮面（中央アフリカのガボンでつくられ、カオリンと呼ばれる粘土で白く彩色されているものが多い）は、日本の能面を想起させます。こうしたことに触発され

抽出した染料で下染めした生地を、発酵させた泥で特徴的な柄を描く、ボゴランという伝統的な布が用いられている。羽織の裏地にはモリタニア風の刺繍が、カメルーンの木の間がコートイネートを完成させている。
[当ページ] 電気回路をイメージしたこの着物の柄は、ろうけつ染めで描かれている。帯は「アフリカの毛布」として知られるケニアの伝統的な織物、マサイユカ。

セルジュ・ムアングの着物は、アフリカと日本の文化を融合させたハイブリッドな作品だ。青色の着物（前ページ）の生地は、ジャワ島のバティックに着想を得た、ろうけつ染めで柄を捺染している。絹の帯は京都で丁寧に手織りされたもの。帯の結びを整える帯揚げは、ガーナのケンテという織物。茶色の着物（44ページ）は地球からインスピレーションを得たもの。ンガラマと呼ばれるアフリカカバノキの葉から

ムアングが「サンセットバイプレーション」と名づけた、鮮やかな色彩が際立つ着物。バティックに用いられる疎水性のワックスを使う、ろうけつ染めの技法で捺染した絹の着物地に、京都で織られた絹の帯と、カメルーンの伝統的なビーズのプレスレットを合わせた。





セルジュ・ムアング
(前ページ)は、ジャワ島の
パティックに着想を得た
ろうけつ染めの生地を使って、
この振袖を制作した。
「ヤングファイヤー」と
名づけられたこの作品にも、
京都の絹帯を合わせている。
モデルの女性が髪に挿す
伝統的な京都のかんざしと
カメルーンの木の櫛が
装いを完成させている。

て、私は『第三の美意識』と名づけた、どちらの文化にも属さない言語を創り出しました。これが、パフォーマンス、服飾、彫刻、視覚芸術によつて具体化される新たな道を切り開いてくれたのです」。

フランスに戻り、ルノーのテクノセンターに復帰した後も、ムアングは第三の美意識を追求し続けた。そして2016年、ついにカーデザインの世界を離れることを決意する。その間、京都を訪ねた彼は、日本の伝統的服飾の極致である着物に関心を持つようになった。「京都は着物発祥の地。着物は日本で着るのに最もふさわしい衣服なんです」。

着物文化に没入するため、ムアングは老舗の呉服店で学んだ。「着物という服飾の歴史だけでなく、その作法、生地の裁断、プロポーション、仕立て、さまざまな小物の合わせ方も理解したかった。そこで、まず東京の着物屋ぐるりと共同で仕事を始め、その後、京都の小田章と組みました。着物の着付けには折られた技術が必要とされるため、時間がかかる。本格的に着付けようとすると、1時間くらいかかることもあります。突き詰める

と、着付けは服地と同じくらい重要で、正しい位置で帯を締める方法や結び方は非常に洗練されています」。

そのなかでムアングが独自に取り組んでいるのが、型にはまらないテキスタイルを使った着物づくりだ。彼は、ボゴラン(細長い布を縫い合わせたマリの伝統的な泥染めの綿布)や、ろ

うけつ染め(パティック風の柄を染め抜いた、サハラ以南のアフリカの綿布、ソドップ(藍染めで幾何学模様を描いた細長い生地を縫い合わせた、カメルーンのバミレケ族の布)といったアフリカの布地を用いる。「西アフリカの布地は非常に多彩です。それを京都で織られた絹の帯と組み合わせることで、ジャンルを融合させる。これが第三の美意識です。私たちは、着物のデザインにより多くの時間を費やします。展示するためのものもあれば、着てもらうためのものもあります」。ムアングが現在、主に仕事をしてい



る京都の小田章は、100年以上続く家族経営の着物メーカーである。

デザイナーであるムアングの役割は作曲家のそれに近い。「小田章での私の仕事は、生地を調達し、柄の繰り返しを調和するような着物をつくること。仕立てた時に柄が合うように裁断するには、高い精度が求められます。絹の帯地を、伝統的に最も清らかとされる京の水で染める時には、細心の注意を払います」。

しかしムアングは、決してアフリカ人のアイデンティティを失わなかった。日本文化の因襲的

「『第三の美意識』が、パフォーマンス、服飾、彫刻、視覚芸術によって具体化される新たな道を切り開いてくれたのです」

構造のなかで受け入れられるために、彼は、あえて日本人のように振る舞うのではなく、出生地であるカメルーンの伝統に従って行動するように努めたという。その判断は正しかった。ムアングはこう言う。「日本では上下関係をしっかりと守ることが大切とされますが、私も子どもの頃、ボディーランゲージを交えてそうすることを教えられたのです」。

着物の伝統を西アフリカの文化と結びつけるのはかなりの賭けだったが、結果的に大成功だった。2008年に、ジャパンタイムズに大きく取り上げられたのをきっかけに、ムアングの仕事は雪だるま式に増えていった。ニューヨークのミュージアム・オブ・アーツ・アンド・デザインからは、日本の漆の技法とピグミー族の彫刻を組み合わせたハイブリッドな作品のデザインを依頼されている。

海外でもムアングの作品を目にする機会が増えている。2020年にロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアムが開催した着物展では、彼がデザインした作品が展示され、その後、この博物館を特集したBBCの番組でも取り上げられた。2022年にはパリのケ・フランリ美術館に、彼の第三の美意識が生み出す新たな作品が展示される予定だ。この試みで、ムアングは、日本の生け花の籠の編み方と西アフリカのヘアスタイルを融合させるという。

今日では、目新しい柄と体を締めつけない軽やかな生地に魅かれて、ムアングの着物を身に着ける日本人も増えてきた。「ある種の自由さがあるところが、いいのかもしれない」と、ムアングは言う。「日本の伝統的な作法から、少しだけ解放された人たちが着てくれるのでしよう」。彼の第三の美意識は、古くから続く伝統に新しい道を示しているのかもしれない。◆